
僕と幻想郷と召喚獣

影月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幻想郷と召喚獣

【Nコード】

N2653Z

【作者名】

影月

【あらすじ】

バカテスと東方のコラボです。

明久魔改造、咲夜はPADじゃない（ここ重要）、文才皆無なんですが頑張ります

挨拶兼補足

初めまして影月です。

このssはバカとテストと召喚獣と東方とちよつとメルブラ要素がある内容です。最初に補足。

主人公は明久。

東方キャラ登場（頑張ります）

お話のメインはバカテスト本編

過度のブレイク&mp;キャラ崩壊

メルブラ要素あり

等ございます。お気をつけて下さい。

あとキャラ設定ですが、

明久、咲夜は同じ歳、霊夢、魔理沙と早苗は明久の一つ下となっております。

そして最後に：咲夜はPADではない！

では次回に（逃亡）

プロローグ1（前書き）

振り分けテスト日の自宅編です。ではどうぞ

プロローグ1

「Zzzzz…」

「…ひ…ろ。…久…てば…」

「う…ん？」

「明久、起きろって、今日はテストなんだから、遅刻したらやばいぞ」

「ふ…うああああ…なんだ…妹紅か…どうしたの？」

朝、なにやら呼ばれたので起きてみると、目の前に妹紅がいた…
彼女の名前は藤原妹紅。僕の幼馴染で何かと気をかけてくれる少女だ。まあホントはまだ色々あるんだけど、それはのちほどに。しかし、妹紅がなぜここにいるんだろう？

「あ、やっと起きた。今日はテストだし一緒に行こうと思ってな。

幽香もいるし早く着替えてこいよ」

「え、あ…うん、わかったよ」

「…二度寝すんなよ？」

「しないよ!？」

妹紅が部屋から出て行ったのでとりあえず着替えよう、幽香も来てるらしいし早く行かないとやばい!!

制服に着替えて（間違えても女子の制服じゃないからね!？）リビングに行くと、

「あら、明久おはよう。今日は起きるの遅かったわね」

「幽香おはよう」

声を掛けてきた少女（作者「え？少女（ピチューン）」）なんか電波

が聞こえたけど無視しよう…

気を取り直して、彼女の名前は風見幽香。見た目、雰囲気的にもお姉さんって感じだけど同級生である。

実際はというと、彼女達は「幻想郷」ということは違う場所の住人で、妖怪（妹紅は違うけど…）なのである。本当は外に出たりしてはいけならしいが、僕が原因で幻想郷の外にごく一部だけ出る事が許可されている。

それより…

「なんで今日は遅いつてわかったの？」

「その花から聞いたのよ」

「あゝなるほど」

花から聞いた…聞き様によつてはおかしな発言だけど事実である。

彼女達は「〴〵程度の能力」というものを持っており（人間でも持っている人はいる）幽香の能力は「花を操る程度の能力」

その名前の通り、花を操ったり、会話したりできる。

「よし、じゃあご飯作るけど、何かご要望とかはある？」

「お任せする（するわ）」

二人を待たせるわけにはいかないし、早く作るかな…

こうしていつもの日常の朝が始まった…でもこの時僕はまだ気づいてなかった…この後僕の運命が決まる重要な事件があることを…

ブローグ1（後書き）

うん… g d g d だ… o r z

読者様に質問ですが、会話の前に名前をつけたほうがいいですか？

1 つけてほしい

2 いらないかな

期限は4日ほどお願いします。

プロローグ2（前書き）

テスト時ですね〜ここで明久は運命の扉を開く！！（嘘です
一応ですが幻想郷の事件は東方星蓮船まで行ってる、ということに
なってます。

なんか自分で首しめそう…

プロローグ2

side 明久

「…ではテストを開始してください」

さてテストが開始したな…え、その間？普通にご飯食べて、三人で来ましたよ？話がないのは作者が書いてないだけです。（私を見ないでえええ、てかメタるなああby作者）また電波が…
ま、まあテストに集中しよう…

ガタッ…

「ん？…！？」

椅子が倒れる音がしたので隣を見てみると、床に倒れこんだ少女がいた。たしかあの子は…

「姫路さん！？大丈夫！？」

とりあえず近づいて確認してみるけど…いけない、顔色が悪い熱もありそうだ…

「姫路、試験途中での退席は無得点扱いとなるが、構わんか？」

この教室の担当の教師から出たのは心配とかではなくこんな言葉だった。

「ちよつと先生！？体調を崩してるのにその言葉は…」

「吉井は席に戻りなさい。で、どうする姫路？」

「……退席……します…」

「では姫路、君は無得点だ」

そう言つて、教卓に戻ろうとする教師。ちよつ、まさかこの教師倒

れた人間に自分で保健室に行けって言うのか!?

「……しつ……れい……しま……あ……!?!」

「!?!」

教室を出ようとしたところで、姫路さんがこけそうになったのでとつさにその体を受け止める。

「大丈夫? 姫路さん? ほら、掴まって、保健室まで連れて行くから」

「吉井くん……でも……」

「気にしないで」

さすがに、ほつとけないし連れて行こう。

「吉井、何をしている!! 早く席につけ!!」

「こんな状態の人を放っておくなんて出来ません!!」

「貴様も、無得点にするぞ!」

「御好きにどうぞ。ここで体調の悪い姫路さんを見捨てる最悪な人間になるくらいなら、無得点になったほうがましです」

「待て、吉井貴様!」

とりあえず、後ろでなんか叫んでるけど無視だ無視。とりあえず姫路さん歩くのもきつそうだし…

「姫路さん、ちよつとごめんね?」

「え?……// // // // //!?!」

ちよつとあれだけ抱えて（俗に言う、お姫様だっこ）行こう。

side 明久end

side 妹紅

やっぱ、明久だよな。

自分よりも周りを大事にする…。私もそんなあいつに助けられたし

な…。

（さうでどうしようかな…）

明久は無得点だし、あいつがいないとこ行ってもつまらないしな…
幽香もそつみたいだし…

いつその事名前無記入で出すかな？

「チツ、屑が…」

そう考えてると、教師があり得ないことをほざいた気が…

「まったく、あのバカの考えてることはわからん。ましてやあの屑
ごときが私を侮辱して…」

…っん、聞き間違いじゃないらしいな…

『『ガタッ！！！』』

あら？音が二つ？気になってそっちを見てみると、すごい笑顔の

幽香が…なるほど考えてることは同じってことだな…

「？何だ藤原、風見、お前たちも無得点になりたいのか!？」

なんか言ってるけどまあいい…

「とりあえず…」

「ええ、まあとりあえず…」

「な、何だお前たち!？」

「「最悪な屑は、お前だ（貴様よ）」」

『『ドゴン!!!!!!!!!!!!!!』』

「げふ!!??」

「じゃあ、私も退席しますね」

「私も退席するわ」

なんか力加減ミスった気がするけど、まあいいか死んでないし…

あ…やばい…慧音と明久に怒られるかも…覚悟しなきゃか…ハア…

side 妹紅 end

side 明久

なんか教室からすごい音がした気が…気のせいだな…
よし着いた。

「失礼します」

「あら？明久君、どうしたの？」

「永…八意先生いたんですね。すみません急患です」

「そう、じゃあそのベットに寝かせて」

この人は八意 永林。保健室の先生で、「幻想郷」の医者である（
休みには幻想郷に帰ってるみたいだ）。

「うん、普通の熱みたいだし親御さんに連絡すれば大丈夫ね」

「そうですか」

「でも、明久君？テスト中じゃないの？」

「実は……」

とりあえず、さっきあったことを永林に話した…

「ふ〜ん…その先生って何て名前？」

「えっ？先生です」

「そう…フフフ…」

なんか笑ってるけど目が笑ってない…とりあえず、先生ご愁傷さま。

「で、この後はどうするの？」

「もうテストは受けられないし妹紅と幽香を待とうかと」

「あら、それならお話ししましょうか。今暇なのよね」

「そうですね」

とりあえず話してる途中で、妹紅と幽香が来たので事情を聞いたところ、永林が一層笑っていない笑顔になったことだけはここに記そう。

帰宅後、僕たち3人は慧音から2時間ほど（二人は+2時間）説教を食らった・・・

プロローグ2（後書き）

おまけ

「でもさ慧音、その教師明久のこと侮辱したんだよ？」

「？どういうことだ？」

「あゝそれはね（幽香説明中）……っということよ」

「……………ほう、でその教師の名前は？」

「ゝ先生（慧音切れてるな……）」

「（切れてるわね……）」

『プルプルガチャッ』

「ああ、永林か？慧音だ…実は…ふむなるほど私も参加するとしよう」

「……（ご愁傷さま）」「」

後日、この教師は首になったそうだ…（妹紅談

第1話 朝の会合（前書き）

いきなりですが、明久は観察処分者ですが、原因は原作と違います。でも、周りからの扱いは原作とほぼ変わりません。

第1話 朝の会合

4月…

今日は文月学園の始業式である…
その頃明久は…

「Z Z Z Z Z…」

「…う…ん…Z Z Z Z Z…」

「もう…まだ寝てるのかしら…明久おきなさ…」

「うん？ふああ…あ、幽香おはよう」

起きてみると幽香がいたので挨拶したんだけど、何で固まってるんだろ…？

「…おはよう。ところでそれ、何？（ニコッ）」

「え？（隣を見る）…うんまず、理由言いたいから聞いてくれる？」

「まあ…聞いてあげるわ…」

隣には昨日一緒にゲームをしていた妹紅が眠っていた…遊び疲れて倒れる形で一緒に寝ちゃったんだろ…

「実は昨日モン。ン3してて…」

「…何時までしてたの？」

「えっと3時くらいまでは記憶がある」

「………」

「………」

「はあ、ゲームは構わないけど時間には気をつけなさいって言うでしょ…」

「あははは…ごめん…」

「まあいいわ。日曜日弾幕勝負で許してあげる」

「えっ………」

「それとこれとは話は別よ（ニコッ）」

「ハイ、ワカリマシタorz」

こうして僕は死亡フラグを立てた…

「明久ごめんな。寝くなっちゃってそのまま寝ちゃった…」

「いいよ、夜遅くまで遊んでたのも悪いし、弾幕勝負で済んだだけ
ましたよ…」

朝ご飯を作っている途中、起きてきた妹紅が謝ってきた。でもみんな抱き癖があるのだろうか…幻想郷での宴会後も朝起きたら結構みんな抱きついてきてるし

「あはは、まあ明久なら大丈夫でしょ」

「ひどいな、僕は普通の人間だよ？」

「…普通の人間が砲撃とかを切ったりしねえよ…まあかつこいいけどさ…／＼／（ボソッ）」

「？どうかした？」

いきなり顔赤くしてどうしたんだろう？

「いや／＼何でもない／＼／」

「そう？ところでさ…」

やっぱりこれは言わなきゃだよな…

「妹紅…やっぱり男子制服で行く気？」

そうである、妹紅は女子制服ではなく男子制服なのである…

「ん？あゝ、うんだってスカートって慣れなくて…それに似合わないし」

「そうか…僕は似合うと思うけどな」

「あははは／＼まあその、ありがとう」

「明久、そろそろ食べないと時間危ないわよ」

「あ、うんわかった。妹紅運ぶの手伝って」

「わかった」

さて、遅刻したらやばいし、早く食べなきゃね。

文月学園前

「おはよう、吉井、藤原、風見」

校門前でスーツを着た先生に出くわした。

「おはようございます、て…西村先生」

「おはようございます、鉄人」

「おはようございます、西村先生」

「ああ、ところで吉井、今鉄人と言いかけなかったか？あと藤原、西村先生と呼べと言ってるだろう」

「気のせいですよ、先生」

「え？かつこいいと思うけどな…鉄人って」

彼は西村先生。通称、鉄人。趣味がトライアスロンだということからそう呼ばれている。また、補習担当の先生で生徒から鬼の補習をするということから相当恐れられている。

「まあいい。ほれ、お前たちのクラスわけの結果だ」

結果が書かれた封筒を鉄人が僕と二人に渡してくる。僕と二人は一緒に封筒の口を破く。

「吉井、先生はお前の行動は立派だと思う。結果は残念だったが…」

「いいんですよ、先生。これは僕が選んだことですから。」

「そうか…」

案の定、Fクラスだった。まあ仕方ないよね、途中退席だし

「しかし、藤原、風見貴様ら教師を殴るとはどういうつもりだ！」

「あいつが明久のことをバカの屑呼ばわりしたからだ（したからよ）…」

「確かに教師としてはあるまじき発言と行為だが、吉井や上白沢先生たちに迷惑をかけたなら意味がなかるう…」

「うつ…それはたしかに…」

「言いごたえ出来ないわね…」

「まあ今回は罰も受けているから処分はなしだ…吉井と上白沢先生
たちに礼を言つとけよ？」

「…はい」「」

「あはは、気にしなくてもいいよ」

「先生、そろそろ自分たちは行きますね」

「んっ、そうか。」

あまり話しこんでると遅刻しちゃうしね

第1話 朝の会合（後書き）

1話まで書けた…一応ですが、宴会時明久は基本酒は飲みません。まあ飲んでも酔いませんけどね。あと生活ですが、ゲームは買うけど日常に余裕があるくらいには節約しています。暮らしとして

幽香 明久 慧音と妹紅

てな感じにアパートに住んでいます。

第2話 AクラスとFクラスのゴリラ（前書き）

…え？PV2000超え…？頑張らないとだな…

第2話 AクラスとFクラスのゴリラ

Aクラス前

「まだ時間あるし、Aクラス見ていこうぜ」
始まりは妹紅のこの一言だった。

「確かに時間あるし、見ていこうか」
「そうね」

少女少女達移動中…

「……………」

「アハハハ…」

「何よこれ…」

目の前には、普通の教室の5倍はある教室だった…

「無駄にお金のかかった教室だね…」

「冷蔵庫とエアコンが個人であるし、ていうか何あの大型ディスプレイ！。それに天井ガラス張りだよ！」

「格差社会ってやつね」

3人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性―学年主任の高橋洋子が立っていた。

「あ、やはりあの先生が担任なんだ…」

「私あの先生苦手だな…」

「私、間違ってもAクラスじゃなくてよかったかも、って今実感したわ…」

これといって悪い先生ではないのだが、この二人はどうも高橋先生が苦手らしい。

「でははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来て

きてください。」

「????????はい。」

名前を呼ばれ立ったのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女―霧島翔子だった

「同性愛者が…」

「「え？」」

霧島翔子は一年生の頃からその容姿で多くの男子から告白されてきた。が、彼女はそれをすべて断ってきた。そのうち彼女は男に興味がないというふうに噂されるようになった。

「いや、霧島さんには同性愛者じゃないかって噂があるじゃない？」

「あゝ確かにそうだな」

「それがどうかしたの？」

「いや…僕にはそう思えなくてね…もしかしたらずっと1人の男の子を想い続けているのかもしれないと思ってね」

「「そう…なんでこれで自分のことには気づかないんだろう（のかしら）…（ボソツ）」」

「？」

「そろそろ教室行こうか」

僕たちはFクラスの教室に歩き出した。

この時僕は、僕たちを見ている銀髪の少女に気づいていなかった。

「ねえ…僕たちいつの間に別世界に来たのかな？」

「明久、現実を見てくれ…私だって逃避したいの我慢してるんだから…」

「これは…ひどいわね…」

今僕たちが目にしているのはとても教室とは思えない、それこそ山

奥の山小屋のような教室だった。

「と、とりあえず中に入る。きつと外よりはマシだよ。」

「そうだな……」

「そうね」

そう言つて、僕は教室のドアを開いた。

『ガラッ』

「おはよ「さつさと席つきやがれ、蛆虫やろう」「う?」

なんだろう、この教室。入った第一声罵倒だった……

「つて雄二なんで教卓に立つてるの?」

「そりゃ担任が」「蛆虫やろうとは言い根性してるな(わね)……」
え?」

罵声を浴びせた少年―坂本雄二はその方に目を向けた。

そこにはもこたn…妹紅とUS…幽香がすごい笑顔で立っていた…

「女の子に対して蛆虫呼ばわりなんて失礼ね……」

「まて、それはお前たちじゃなくて明久のこと……」

「ほう、明久を蛆虫呼ばわりなんて……」

「「覚悟出来てるんだろうな(わよね)?」」

「ち、ちよつと待ってくれ!。言い過ぎた。俺が悪かった!。だから?????あ、明久!。助けてくれ!。」

雄二が助けを求めてくる…仕方ない…

「二人とも……」

「「なに?明久」」

「あとでやつてもかまわないから、今は席に着こう?」

「「そうだな(そうね)」」

「ち、ちよつと待て明久!?!見捨てる気か?!」

雄二は必死に助けを求めるが、

「だって原因雄二じゃん」

僕は切り捨てることにした。

第2話 AクラスとFクラスのゴリラ（後書き）

次回のお話は？

とうとう始まった本編、雄二のおとしめようとする策略の明久はどう対抗するのか？

お楽しみに（大ウソです

第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台（前書き）

明久の紹介どうしようかな…あと最初の担任変更b

第3話 自己紹介と粉碎されるちゃぶ台

「君たち、そろそろ授業始まるから席につきなさい」

「あ、すいませ…って慧…上白沢先生…」

後ろから声がかけられたので振り返ってみると、そこには慧音が立っていた。

彼女は上白沢 慧音。彼女も幻想郷の住人で、妹紅との同居人である。幻想郷でも寺子屋で教師をしているが、一応のこちらでの住人の監視を理由に教師をしている

「あ、慧音おはよう」

「藤原さん、学校では上白沢先生です」

敬語なのは教師としてのけじめらしい。

「さて今日からFクラスの担任になる（黒板に名前を書こうとする）

…上白沢慧音です」

「なあ、明久慧音どうしたんだ？」

「さっき黒板見たときチヨークがなかった…」

「この学園ホントに勉強させる気あるのかしら…」

ちなみに席は、妹紅が前で、幽香が後ろである。あ、慧音がチヨークを取りに行った…

「うおおおお！！すげえ美人だ！！」

「不思議な帽子をかぶってるが、逆に美人度が増してる！！」

戻ってきたみたいだね…（頬に血が付いてるようにも見えただけ気のせいのはずだ…）

「えっと、何かありますか？」

「付き合ってください！！」

「…」「異端者には、死を！」「…」

「すみませんでした!!!」

「ばかばっかね」

「ハア」

「とりあえず、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

その男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。

「あと言っておくが、わしは男じゃ」

「「「「な、なんだと!?」」」」

みんな失礼だよね…（明久は男として認識しています）

「……………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年―土屋康太だ。彼はあるあだ名を持っているがまあいいだろう。

そしてまたしばらく自己紹介が続いて、

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。あ、でも、英語も苦手です。趣味は―」

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女―島田美波は一回区切り、

「吉井明久を殴る事です」

『シュッ!』（幽香がペンを投げた音）

『ガッン!!--!』（慧音がチョークで相さ…はじいた音）

「え…?」

呆然とする島田さん

「風見さん、ペンは投げないように」

「考えとくわ」

「幽香…」

「…わかったわよ…」

僕が非難がましく名前を呼ぶとむすくれながらも了承した（妹紅に
関しては投げる前に止めた）

「島田さんもそのような発言は控えるようにしてくださいね（ニコ
ッ）」

「は、ハイ…（あの二人…吉井とどういう関係かしら…）」

島田さん、妹紅と幽香を恨めしそうに見てるがどうしたんだろう…

「あいつには気をつけなきゃだよな」

「そうね…」

「どうしたの？二人とも」

「「気にするな（気にしないで）」」

2人はそれぞれ笑顔で言った。

「………です、よろしく」

次は妹紅だな

「藤原妹紅です、男子制服を着ているが女なんであしからず」

「なるほど木下みたいなものか」

「じゃから、わしは男じゃ…！」

うん…もう突っ込むまい…

「あと、後ろにいる明久とは幼馴染です」

「「「異端者には、死…」」」」

「明久に手出したら…」

『バギャンツツツ！！！！』（ちゃぶ台が碎け散る音）

「こうなるからよろしく」

「「「YES sir!」」」

「も、妹紅…」

「だつて明久に…」

「それもだけどちやぶ台…」

僕らの前には碎け散つた妹紅のちやぶ台…

「」

「」

「明久、ちやぶ台一緒に使わせて…」

「別にいいけど…」

おつと次は僕か…うゝんこの微妙な空気どうしよう…仕方ない…

「ーコホン。えーつと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくだ

さいね」

…ボケよう

次の瞬間、

「「「ダアアーリーーン!!。」」」

野太い男の大合唱。

「（言えるわけないだろう／＼／＼）」

「（明久ってそう呼ばれるのが好きなのかしら?）」

「（何言ってるんだ、あいつは／＼／＼）」

やばい、吐き気が…空気を替えるためとはいえやるんじゃなかった

…しかし妹紅と慧音と幽香はなんで顔赤いんだろう?

「????????失礼、忘れてください。とりあえずよろしくお
願います。」

さあ気を取り直して次は幽香だね

「風見幽香よ。好きなものは花、嫌いなものは花をいじめるものよ」
ふう、普通だ…

「あと、明久の幼馴染でもあるわ」

すっごい笑顔で言い放った…やっぱりこの人Sだ…僕が困るところをそんなに見たいのか…？

「くそう、なんで吉井ばかり…」

「あんな不細工が…」

うわゝみんなひどいや…精神的ダメージがやばい…

「あと、明久に手を出したら…」

？やばっ！？

『ゴウツ！！！！』（幽香がちゃぶ台に腕を振りぬく音）

『バシッ！！！！』（幽香の手をあわてて明久が止めた音）

「どうしたの？」

「幽香、ちゃぶ台が壊れるからストップ…（手がジンジンする…でも手加減してたみたいだね…）」

「…仕方ないわね…」あの、遅れて、すいま、せん。」「…」

「…え？。」「」

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

第3話 自己紹介と粉碎されるちやぶ台（後書き）

さて机が二つ犠牲になるところでした。

慧音の頬の血は気のせいさ…（ハハハ

ちなみにチヨークとペンは相殺で粉碎しました。

第4話 理由と試験戦争（前書き）

PV2000っていったころにはもう3000行きそつだ…

第4話 理由と試験戦争

教室のドアから現れた女子生徒を見てクラス内がにわかに騒がしくなる。それもそうだろう。彼女は本来このクラスにはいるはずがない生徒だ。

走ってきたのだろうか…息が少し荒い

「ちょうどよかったです。自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします？
????？」

小柄な身体と背中に届くまでの柔らかそうな髪を持った少女、姫路瑞希はあわてて自己紹介をした。

「はいっ！質問です！」

すると1人の男子生徒が手を挙げた。

「なんでここにいますか？」

聞き方によっては失礼な質問だが、彼女の場合仕方ないのかもしれない

元々瑞希の学力は学年でも常に上位にあるほどに高い。

そんな彼女が学年最下位のFクラスに来たのだから誰もが疑問に思うだろう。

「そ、その??????振り分け試験の時に高熱を出してしまいまして??????」

やばい…あの時のことを思い出したら少しイライラしてきた…（プロローグ2参照）

「明久…」

「大丈夫だよ妹紅ちよつとね…」

いけないいけない、心配掛けたら意味ないじゃないか…すると先ほどの姫路さんの発言に

「そういえば俺も熱が出たせいでFクラスに。」

「ああ、化学だろ？あれはむずかしかったな。」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力出し切れなくて。」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩藤原さんが寝かせてくれなくて。」

「……異端者には…昨日私は明久の家に泊まってたからあり得ないな」「ちよつ、妹紅!？」…チクシヨオオオオオオオ!!!
「!!!!!!」

これは想像以上にバカばかりのクラスである。

「で、では一年間よろしくお願いします!」

そう言うつと瑞樹は明久と雄二付近の空いてる席に着いた。

「き、緊張しました〜」

そう言うつと瑞希が卓袱台に突っ伏した。

「あのさ姫「姫路」…」

体調は大丈夫か声をかけようとしたらゴリラが声をかぶせてきやがった…

「は、はい。何ですか？え〜と…」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしくお願いします。」

深々と頭を下げ、挨拶も丁寧なあたり育ちが良さそうである。

「ところで体調もう大丈夫なの？」

「よ、吉井君！？」

声をかけた僕を見て姫路さんが驚いた…なんだろう…ちょっと悲しい…

「姫路。明久がブサイクですまん。」

「そ、そんな！目もパツチリしてるし顔のラインも綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！」

「そうね、女性に向かって蛆虫っていう奴よりはるかにかっこいいわね」

「うん、ゴリラよりは絶対かっこいいな」

「うぐっ・・・ま、まあ確かに見てくれは悪くないな。そういえば俺の知り合いにも明久に興味を持ってる奴がいたな。」

「それって誰ですか！？」

雄二が言うのと嫌な予感しかしないな…

「確か久保ー」

「久保？」

「利光だったかなあ。」

久保利光ー♂（性別 オス）

…うん、だろうと思ったよ…

「…（ホッ）」

「ゴリラ…」

「え？…」

「「覚悟はできてるか（わよね）」」

「ちよっ！？」

「ほらそこ、静かにしなさい」

「あ、すいませ…」

『バキッ、パラパラ…』（教卓が残骸となった）

「…ちよつと、替え持ってきてきますね（あの学園長どうシメテくれようか…）」

「あ、手伝いましょうか？」

「いえ、大丈夫ですよ吉井君。教室で待つててください」

さすがにこの環境は姫路さんにも悪いし、いくら頑丈とはいえ妹紅達の体にも悪いな…

「・・・雄二、ちよつといい？」

「ん？なんだ？」

暇になったからか欠伸をしている雄二に声をかける。

「ここじゃ話にくいから、廊下で。」

「別に構わんが。」

「で、明久何の用だ？」

「雄二この教室の設備なんだけど。」

「ああ、想像以上に酷いもんだな。」

「そこで僕からの提案。Aクラス相手に試召戦争をやってみない？」

「・・・何が目的だ。」

雄二が警戒するように目を細めてこちらを見る

「何がって、姫路さんと妹紅達のためだよ」

「……」

「あの教室じゃ体調崩すのは目に見えてるからね」

「お前：本当に明久か？」

「それどういう意味さ！？」

「まあいい明久に言われるまでもなく俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思ってた所だ。」

「え、どうして？」

「世の中学力が全てじゃないって証明したくてな。」

「???」

「まあいいだろ。先生も戻ってきたし教室に入るぞ。」

「ではクラス代表の坂本君、最後をお願いします」

雄二の番になり、雄二は教卓に上がった。目立ちたがりだね。雄二

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きに呼んでくれ」

「じゃあゴリラで」

妹紅：

「所で皆に一つ聞きたい。」

そう言くと雄二は視線を巡らせた。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……不満はないか？」

「……大ありじゃあつ！……！」

Fクラス魂の叫びである。ちょっと耳が痛い……

「だろう？俺だってこの現状に大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。そこでこれは代表としての提案だが・・・FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」

こうして戦争の引き金は引かれた。

でも何だろう・・・すごく不安に感じる・・・

第4話 理由と試験戦争（後書き）

おまけ

「明久、ゴリラと何話してたんだ？」

「うん？あゝ試験召喚戦争についてね」

「あら、楽しそうねそれ」

「うん、特にこんなクラスじゃ、妹紅と幽香が体調崩さないか心配なんだよ」

「／／／／／／／／／／」

「？」

第5話 戦力と観察処分者（前書き）

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・ （ゴシゴシゴシ） ・ ・ ・ ・ ・
P V 5 0 0 0 超え ・ ・ ・ ・ ・ だ ・ ・ ・ ・ ・ と ・ ・ ・ ・ ・ ?

第5話 戦力と観察処分者

「FクラスはAクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う!!」
壇上で自己紹介をしていた雄二のいきなりの提案。だが、いきなり
言われても現実味のない提案にクラス中から非難の嵐が巻き起こる。
「勝てるわけがない!」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ!」

「姫路さんが居たら何もいらない。」

「もこたん付き合って」

「断る」

「ゆづかりん罵ってください」

「……シニタイノカシラ?」

「うおおおおおおおお!!!!!!」

何だろう、カオスだ…

試験召喚戦争は大まかに言えば、生徒が行うテストの成績によって
試験召喚獣の強さが決まる。そして試験召喚獣を使って擬似的な戦
争を行う。相手のクラスの代表を討ち取ったクラスが勝者だ。

試験召喚獣は戦争中の道具と思ってくれていい。

しかし雄二の提案は端から見れば無謀としか思えない発言である。

片や2学年の成績が悪かった人たちが集まったFクラス。

片や2学年の成績上位の人たちが集まったAクラス。

戦力の差は明白だった。

「そんなことはない。必ず勝てる、いや、俺が勝たせてみせる!」

しかし雄二は非難の嵐を撥ね退けるかのごとく言い放った。提案し
た僕が言うのもなんだけど、何か根拠があるのだろうか?

「このFクラスにはAクラスに勝てる戦力が揃っているからな。今
からそれを説明してやる!」

そうゆうと雄二は少し間を置いて、ある一カ所を見た。

「土屋。畳に顔をつけて姫路と風見のスカートを覗こうとしてないでこっちに来い」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ！？」

「あらあら……」

「ゆ、幽香？……」

「？どうしたの明久？覗かれてないわよ？」

「……くっ」

「いや、よく手を出さなかったな〜って……」

「……すぐに切れてると迷惑かけるもの……」

「そうか……」

まあ話は戻してつと、土屋は畳の跡を隠しながら雄二の元へと行く。

「こいつ、土屋康太は知る人ぞ知る人間、寡黙なる性識者だ」
ムツリーニ

「……！！」

雄二の発言に、クラスのどよめきが走る。

彼は土屋康太という名前では別段有名ではない。だが、ムツリーニとなると話は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑の対象として挙げられている。

「ム、ムツリーニだと！？」

「馬鹿な、奴がそうだというのか！？」

「だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だ隠そうとしているぞ……」

「ああ。ムツリーの名に恥じない姿だ……」

「……」

まあ男の子として仕方ないけど、盗撮とかはやめてほしいと思うよ……友人として

「姫路の事は説明するまでもないだろう。みんなだって、その力は知っているはずだ」

「えっ？ わっ、私ですかっ！？」

「ああ、主戦力だ。期待している。」

姫路さんは成績上位の人だから当然だね。

「そうだ、俺たちには姫路さんが居るんだった！」

「彼女なら、Aクラスにも引けをとらない」

「ああ、彼女がいれば何もいらない」

「あと風見幽香もAクラス並みの点数点数保持者だ」

「そうだ！幽香様がいた！！」

「ゆうかりいいいいいいん！！！！」

「明久：ねえあれヤッテイイ？」

「：ダメだからね？」

「藤原妹紅に関しても、古典、歴史関係はAクラス並みだ」

「：「もこたゝゝゝん！！」」」

「幽香の気持ちわかるかも」

「アハハハ」

「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす」

Aクラスの優子さんの双子の姉と演劇部のホープという要素で有名な人物。そして、雄二は……？

「坂本って、確か小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが4人もいるって事かよ？」

もしかしたら、やれるんじゃないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

やっぱり雄二は人をまとめるのがうまいな……こういうところは悪友として認めてるんだけど……

「それに吉井明久もいる！」

その瞬間、クラスの時間が一時停止した。やっぱり余計なひと言があるね……

静まりかえる教室……なんで僕の名前を言っかなあ。

「誰だ？ 吉井明久って？」

「知らねえよ。」

雄二の発言に上がりかけた士気が一気に下落する。まわりのクラスメイトはざわつき始めた。

「そうか、知らないなら教えてやる。そこにいる奴が吉井明久で、学園史上初の観察処分者だ。」

・ 雄二は僕を指さして言わなくてもいいことまで言った。雄二の奴・

「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

まあ、普通そういう評価だよな……

「ああ、学年1のバカの屑だ」

そこまで言うかこのゴリラ……

「ほう……ゴリラ……そんなに燃やされたいのか？」

「そうね……肉片にして花の肥やしにしようかしら……でも花がかわいそうね……」

「し、しかし明久は教師の許可をもらって俺たちより召喚獣扱ってる分操作技術だけなら学年1だ」

「それってすごいのか？」

「ああ、盾くらいにはできる」

妹紅と幽香を止めてるのをいいことにひどい言いようだな……

「これだけの有名人が揃っているんだ。お前ら、勝って当然だろ？」

「そうだ！ これだけの人物がいるんだ！ 絶対勝てる！」

「もしかしたら打倒Aクラスも夢じゃない！」

「そうだ！ 俺たちに必要なのは座布団じゃない！ リクライニングシートだ！」

まずは俺たちの力の証明としてDクラスを征服したい。皆、この境遇には大いに不満だろ！？

「当然だ……！」

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ……！」

「……おおおおおっ……！」

「俺たちに必要なのは、卓袱台じゃない！ Aクラスのシステムデスクだ……！」

「……うおおおおおおおおおおっ……！」

「お、お……！」

雰囲気を押され、姫路さんも懸命さが見て取れるように小さく拳を
挙げる。

何だろう…僕には不安しかないよ…

第5話 戦力と観察処分者（後書き）

話のスピードが遅いな…

ここでの設定ですが、観察処分者のフィードバックは20%くらいとします。

思いつき次第次話を投稿します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2653z/>

僕と幻想郷と召喚獣

2011年12月10日19時45分発行